

平成二十四年十一月九日 シンポジウム

「場所主義について」

公益財団法人和敬塾 理事長 前川 正雄

皆さん、こんにちは（塾生「こんにちは」と返事）。これで君たちとの話は三回目ぐらいになりますね。ぜひ、表面的なことだけではなく、世相の深いところで何が起きているのか、どういうふうにするべきか、そういうことを常に考える姿勢を身につけていただきたいと思います。今日は塾友（OB）の方も見えていますので、ぜひ発言して塾生にアドバイスをいただければありがたいです。わざわざお越しいただきまして、ありがとうございます。

和敬塾は昭和三十年頃、私がまだ学生だったころにできた学生寮です。和敬塾の前身に「和敬会」というものがありまして、そこでお坊さんの話を聞かせていた。これがいくらやっても日本の社会にあまり響かない。これは学生のころから鍛えないとダメだと、私の親父（和敬塾創立者 前川喜作）は考えました。そのとき私はまだ早稲田の学生だったもんですから、「学生を

何百人も集めたら大騒ぎになるぞ。絶対やめたほうがいい」と言ったのですが、親父は「どうしてもやるんだ」と言って、和敬塾はスタートしました。

和敬塾を設立した意図は何かというと、「共同生活を通した人間形成」です。かつていいことをいっていますが、なんてことはない、「もう一度、日本の伝統的なものに帰る」ということです。アメリカナイズされたものを排除する。基本的に反米です。

終戦直後、マッカーサーは日本に来て、徹底的に日本をつぶしにかかりました。まず、家族法を改定する。相続法なども全部改定する。労働組合をつくる。天皇制を廃止に近い状態に追いこむ。大きな柱をとりあげて、日本を崩壊に向かわせるのがアメリカの基本戦略だったわけであります。

当時、表立ってこれに反対することはできませんでした。ですから「共同生活を通した人間形成」というのは、「日本的な生

活を通して、もう一度、日本人らしいものを取り戻していこう」ということで、真意は反米なのです。と同時に、とうぜん反共になります。日本的なところを深く求めていく集団をつくる、これが和敬塾の設立の趣旨であつたわけであります。

「共同生活を通した人間形成」といいますが、ともかく、共同生活を通さないと人間は形成されていけないということです。共同生活という「場所」の中で、自分を発見する、他人を知る、己を表現する、社会を知る。それによって社会のリーダーシップをとる人間が育っていく。これは非常に日本的な教育方法です。欧米のエリート教育方法とは全然ちがいます。欧米のエリートは、論理的方法で手をつけて力で押しこんでいきますが、日本の場合は共同体の話し合い——「寄りあい」によって物事を決めていきます。そういう意味では民主主義にも反するわけです。したがって、和

敬塾にはもともと、皆さんが漠然と思って
いるような民主主義という言葉はありま
せん。共同体というのは、民主主義とは相
反する考え方なのです。では、それはどう
いうことなのか。

今の日本社会を見てみると、民主主義は
完全に行きづまっていきます。アメリカを見
ても、ヨーロッパを見ても、民主主義は機
能しているかどうか。アメリカの今の選挙
を見てみると、「あれが民主主義か。あんな
ものが民主主義なら、民主主義はいらな
い」、こう言ってもいくら墮落してい
ますね。

ですから、いま日本が民主主義を取り除
いて機能しはじめたことを、私は非常に大
事な現象だと思うのです。私は十年ほどス
イスにいますが、スイスから日本を見てい
ると、日本が正常な方向に動いていること
がよくわかります。どういう方向かという
と、思想的な右と左がなくなっている。そ
れで、真ん中にどんどん集まっている。真
ん中にどんな派閥があるかと、これはかま
わない。もともと、日本の「寄りあい」と
いうものはそういうものだったのです。
「寄りあい」については、宮本常一（み
やもとつねいち、一九〇七年～一九八一
年）という民俗学者が本を書いています。

終戦直後、宮本常一は対馬に旅行して現地
調査しました。その本がいまだに世に出て
います（『忘れられた日本人』一九六〇年
刊）。これを見てみると、対馬の村では、
集会所みたいなどころで、三日三晩、徹底
的に話をするといえます。宮本常一は三日
三晩つきあつたのです。そこでどうい
うことをやっていたか。集会所には、五、六人
で座敷にすわって話しているグループが
二つくらいありました。それから、集会所
の外に三つくらいグループがあつて、立っ
て話したりしゃがんで話したりしていま
す。集会所の外で十分に議論し、それを集
会所の中に持って行って、それぞれのリー
ダーたちが中に集まってまた議論するの
です。それをまた持つて帰ります。そうす
ること、三日かかって全員が完全に合意
するので、田舎のことですから、水の配
分の問題など、話し合う問題は非常にリア
ルな問題のはずです。それがもの見事
に解決してきます。これは民主主義の多数
決とは全然ちがうのです。考えてみると、
日本は古来この「寄りあい」という方法で
社会と個人とが合意し、ひとつのコミュニ
ティをつくつてきた歴史があります。長年
来それをつづけて、日本の共同体は進化し
てきたのです。

したがって、敗戦後、日本に民主主義が
入ってきたのは、とつてつけたようなムリ
なことなのですね。戦後というより、大正
以来かもしれません。明治は民主主義とは
いえませんが、大正デモクラシーからお
かしくなってきたといえます。戦後は完全
におかしくなりました。それが今、だんだ
んと元の状態に戻りはじめています。私は
この十年間スイスから日本を見ていて、そ
う思います。

その結果として、今後、日本では従来型
の民主主義による政治はなくなっていく
ます。おそらく、民主主義を超えた「超民
主主義」による最初の国家が、日本になる
という気がしています。

そういう意味で、「共同生活を通した人
間形成」は、これからの日本でいちばん大
事なことなのです。これは上古以来の日本
の伝統的なやり方であり、和敬塾はそれを
やってきた団体なんです。皆さんには、
ぜひ和敬塾の共同生活を通して、平成の日
本人がいつたいどういふふう社会をつ
くつていくべきなのか、よく考えていた
きたいと思っています。

質疑応答

●質問（北寮三年・黒坂君）

現在、和敬塾に入塾する多くの大学生は、大学に通いはじめたものではものすごくやる気にあふれています。でも、実際に大学に行きはじめると、理想とのギャップがあって、やる気を失っていく学生が多いのが現状です。そのような状況は、和敬塾設立当初の状況とはかなり異なっているのではないのでしょうか。こういう状況下で、どのように「共同体を通じた人間形成」を促していくべきだとお考えですか。

■回答

私は昭和二十六年に大学に入ったのですが、昭和二十六年というと一九五一年です。その当時の学生で、大学に入って「いいところに入った」「価値がある」と思った人は一人もいません（会場笑）。本当にいないのです。もともと学生というのはそういうものです。「いいところへ入ろう」と思うのがおかしいんだよ。そんなところあるはずがない。場所をどう自分のものに変えていくかは自分の問題です。「人が何かやってくれる」という問題ではないのです。

和敬塾を設立した時代より、今のほうが

ずっとハッピーだよ。当時は終戦直後で、もつとメチャクチャでした。それと日本はまだいいほうで、海外はもつとひどいです。

いずれにしても、大学に何かを期待するとか、外部の世界に何かを期待するのではなく、自分のいる場所を自分でどうやってつくっていくかなのです。自分の立っている場所をどうやって深堀りしていくか。そこからどんどん自分で栄養分を吸収する。自分のいる「場所」には学校もあるだろうし、先生もいるかもしれないし、学生もいるかもしれない。飲み屋もあるかもしれないし、いろいろなことがあるわけです。それをどうやって自分の知恵にしていくかということは、自分の問題であって誰の問題でもないのです。

●質問（北寮三年・黒坂君）

自分で吸収するという意識が、昔に比べてなくなってしまうのではないかと思っただけです。

■回答

昔は全然なかったよ（会場笑）。

●質問（北寮三年・黒坂君）

やる気を失った塾生の中には、留年して

しまう人もいます。もちろん本人が気を付けるべきことですが、そのような塾生に対してはどうすればよいでしょうか。

■回答

これはもう放っておく以外にしようがないです。本人がやる気にならない限り、外から何をいってもやる気が起きるなんてことはありえません。

今はそういう学生を心配してくれる人がいますが、我々が学生のときはそんなことを心配してくれる人はいませんでした。それでも伸びる人はちゃんと伸びてきますから、あんまり心配する必要はないと思います。

●質問（南寮二年・鬼界君）

場所主義は和敬塾でどう実践されていくべきですか。また、現状の和敬塾に欠けているものは何でしょうか。

■回答

これは非常にむずかしい問題ですね。まず「場所」というのはいったい何かという問題なんです。実は場所というのは説明しようがないんです。感じてもらう以外ない。なぜか。たとえば君は「命」というの

を説明できるかい？ 「死」を説明できるかい？ できないですよ。一人ひとりちがうんです。「自己とは何か」という質問と同じです。一人ずつ考えないといけない。その答えには普遍性がないんです。「自己とは何か」というのはギリシヤ以来ずっと議論されていて、結論は出ていません。ということは、この議論は結論が出ない。「場所」もそうです。

ただ、そういうテーマが世の中でいちばん大事です。かたちが見えて数字になっているものは、だいたいがどうでもいいものですね。かたちになっていない「命」だとか「死」だとか「自己」だとか、こういうものがいちばん大事なんです。なぜ大事か。論理的に説明できないんです。「命」というのは順序を追って説明できるかというのと、できない。西田幾多郎（にしだきたろう、一八七〇年〜一九四五年。哲学者、京都学派の創始者）が「場所」についていろいろいっています。が、「全体の一部をあらわしている。あとは自分で全体を想像してくれ」といっています。

切り口はいっぱいあります。自分の切り口をどんどんひろげていって、自分の場所を自分でつくっていく。こういうことです。今の学生にいちばん欠けていると思うの

は、そういうふうな現象から本質をつかんでいく力です。自分にしかできない合成の仕方、そういう力を身につける。そういう教育は、戦前に旧制高校でやっていました。これからまたそういう時代をつくらないといけないのです。

今は論理的な情報がいっぱいあります。コンピュータにしても何にしても、いろいろなところからいくらでも出てきます。だけど、あれは全部「死んだ情報」なんです。場所というのは「生きた情報」しかない。ですから、生きた情報をどう扱うかという時代が二十一世紀です。死んだ情報をどう扱うかは二十世紀で終わりました。

したがって君たちも、場所の情報をどうやって自分のものにしていくか、それを通してどうやって自分の考えをまとめていくか、こういうことがいちばん大事です。それができれば、学校の勉強なんかどうでもいいと思うよ。むしろそっちのほうがずっと大事だよ。学校の勉強なんかいつでもできるわけです。本はいつでも読めます。ところが、共同体の中で自分を考えるのは、今ここでしかできません。

今この和敬塾で、自分にとって「場所」とは何なのか、生活や友達との議論を通して徹底的につかんでいく。このやり方は日

本流です。民主主義ではないですよ。多数決でどうしようという問題ではない。それをせひやってみてほしいと思います。

そういう意味では、「場所」というのは禅問答に近いんです。ですから、坐禅をやるのは非常にいいことですね。君は坐禅をやったことがある？ やったことない？

（「一度あります」と返事）。やったことがある人はわかるだろうけど、老師が公案（参禅者に対して、悟りを導きだすために与える課題。日常を超えた思考を要求することが多い）をくれるんですね。その答えを自分で考えないといけないんですが、答えは自分の中にしかない。人に聞いたり本を読んだりして答えを出すのではなく、自分の生活体験の中から出てくる。「場所」もそういう問題です。

ヨーロッパは今、これまでやってきた論理的な社会をものごく反省しています。論理的な社会に将来はないと思っています。それで、日本の禅が非常に見直されているんですね。日本にいる君たちは、せひ坐禅をやってみたらいいと思います。

●質問（南寮三年・川崎君）

「場所」というものが「命」と同じように論理で導きだすことができない観念的

なものだとすれば、「場所主義」というのはあくまでイデオロギーだと思えます。システムとしての骨格を持たない以上、そもそも民主主義と対比するものでもないと思うのですが、いかがですか。

■ 回答

私という場所主義は日本の文化をベースにした場所主義で、「日本の場所主義」なのです。おそらくヨーロッパにはヨーロッパの場所主義があるだろうし、アメリカにはアメリカの場所主義があるだろうと思えます。

先ほどいったように、日本の場所主義は古くからつづく「寄りあい」による完全合意です。ひとつの問題に徹底的に時間をかける。簡単にいうけど非常にむずかしい。この合意システムを完成するために、おそらく日本人は何万年もかけただろうと思えます。合意システムをつくる過程で、飛鳥文化の時代、「もののははれ」に代表される平安の王朝文化の時代や江戸の国学の時代を経験しました。これまでのあらゆる文化が、日本の場所主義を理論的に作りあげていくプロセスのなかにあっただろうと思えます。

したがって、日本の場所主義はイデオロ

ギーではなくて生き方なのです。民主主義なんかと対比できるレベルではない。日本人の生き方そのものです。日本の場所主義は、日本人の文化と歴史、あらゆるものを含むものだと考えるべきですね。

● 質問（南寮三年・川崎君）

「場所主義」というものは、アメリカに代表される「民主主義」に相對する概念、ということではないのでしょうか。

■ 回答

日本の寄りあい文化と場所主義は、何かに相對するようなものではないのです。自身と自分のいる世界とを深掘りしていくことなのです。

折口信夫（おりぐちしのぶ、一八八七～一九五三年）という民俗学者がいます。この人は「マレビト」ということをいっている（稀人・客人。共同体の外からやってくるものの意）。外からマレビトを迎えるときに内部でものごとく議論をする。そして完全に合意してマレビトを迎えます。『魏志倭人伝』に「倭国乱れ、相攻伐すること歴年」（倭国大乱）という一節があるのですが、あれは日本に仏教が伝わった際の、仏教と神道の葛藤だったのではないかと

いわれています。私も可能性は充分あると思う。神道と仏教、あれだけのものが日本で完全に合意してひとつのものになる。ヨーロッパではキリスト教とユダヤ教がひとつになるようなことはとてもできないけども、日本はそれをやっているわけです。そのほかにも、禅が伝わってきたら、禅と一体になった新しいものをつくっていく。儒教が入ってきたら、儒教と一体になった新しいものをつくっていく。ヨーロッパの文明が入ってきたら、ヨーロッパ文明と一体になった新しいものをつくっていく。そういうふうには、新しいものを受け入れて日本的なものにしていくのが日本の場所性なのです。日本はそういうことが得意なんです。

おそらく、これができるのは世界中で日本ぐらいではないかと思えます。中国やインド、西洋、世界中からいろいろなもの流れこんだときに、多数決みたいに何かを切り捨てることはしないで、日本という場所の中で完全合意してひとつになつていく。そうやってできあがったのが、今の君たちなんだよ。

ですから、それをよく噛みしめて、いたい日本人とは何ぞや、我々はどうしてこういうふうになったのか、ほかの国とどう

ちがうのか——こういうことを和敬塾の四年間できっちり学んで習得してもらうのが大事だと思います。

●質問（南寮三年・川崎君）

「寄りあい」で行われた「多数決ではなく場所の中で合意する」ということは、具体的にどういうことでしょうか。

■回答

これは三日間連続して飯も食わないで議論しているとわかりますが、答えがひとりでに落ちつくところへ落ちつくんです。今これをやっているのは日本の製造業です。製造業の改善・改良というのは、全部このスタイルですめています。

いま製造業には、パナソニックとかシャープとかサヨーとか、おかしくなっている会社がありますね。ひところは非常に優秀な会社だったんです。あれは結局、経営方針が悪いとか金がないとか技術がないとか、そういうことではないんです。共同体が崩壊しているのです。「場所性」をなくしている。これはもう、現場に行ってみるとすぐわかります。

今、日本の製造業で産業を輸出している力はすべて「場所力」なんです。共同

体力」なんです。これはつかみどころのない力だから、ときにバーツと大きくなったり、スーツと減ったりする。ソニーなんかも、井深さんがやっていたころはすごい共同体だったよ（井深大 いぶかまさる、一九〇八年〜一九九七年。ソニーの創業者の一人）。それがいつのまにか崩壊してしまふ。

ですから、日本の完全合意の共同体制というのは、おそらく唯一で最大の資産なんです。君たちはそういうことを和敬塾で習得するのが大事ですよ。学校のどうでもいい勉強なんかいいかげんにしておいたほうがいい。勉強なんかいつでもできる。それよりも、もっと大事なことがあるんだよ。

●質問（東寮二年・神近君）

場所主義の考え方を寮運営にとりいれるとして、そこから生まれる一番のメリットは何でしょうか。

■回答

場所主義の問題は、やはり「場所」ということに答えがあるのです。どの場所でもたいてい問題点がいっぱいありますね。そうすると、場所というのは問題の集積みたいなものなのです。その問題を、場所にい

る全員で解決していく。問題解決のプロセスで、自分を他の人に知らせて、同時に他の人を知る。おたがいそうすることで、場所にいる全員に合意ができてくる。全員が合意すればひとつの問題が片づきます。ところが問題は次から次へと出てくる。何度でも問題解決のプロセスをとる。そういうことをくりかえしているうちに、その場所は共同体として深化していく。場所の深度が深まっていく。と同時に、個々人のポテンシャルも上がっていく。

したがって、共同体のなかで議論していくことが大事なんです。

●質問（東寮二年・神近君）

場所主義を寮運営にとりいれるとしたら、どういう方法があるでしょうか。先輩と話す時間を増やしていくのがよいでしょうか。

■回答

それよりも、やはり場所の中の問題を片づけていくことです。そのなかで、当然、悩みが出てきますね。迷うこともありますね。そういうときは、先輩に話を聞いてもらったり本を読んでみたりするのではなく、自分自身で迷わなければいけない。人

の意見なんか聞いたって、右の耳から入って左の耳から出ていくだけでなんにもならないんです。自分が場所の中で悩まないといけない。どうしたらいいかと悩みぬいたあとにやってくる、外部からのヒントや先輩の一言、こういうものが非常に大事です。

いちばん大事なのは、おそらく仲間のひとと通して人を知る、自分を知らせる。それが共同体を深めていくということになるのです。

●質問（南寮三年・福丸君）

場所主義には完全合意があり、民主主義にはないとおっしゃいました。しかし民主主義でも、討論を行うときはやはりおたがいの立場を理解しつつ自分の考えを主張するということが行われると思います。場所主義の討論と、民主主義的な討論というのは、何がちがうんでしょうか。

■回答

決定的にちがうのは徹底的な議論をしないことです。だから多数決になります。多数決で決めるということは、徹底的な議論をしないという証拠ですね。それを超え

て徹底的な議論をしようとするのが場所主義です。ひとつの答えをつかもうと議論して、二時間くらい話して答えが出ないもんだから「多数決で決めましょう」、これではろくなものが出てきません。

●質問（南寮三年・福丸君）

民主主義的な多数決も、多数の意見だけではなく、少数の意見も考慮しているのではないですか。

■回答

少数の意見をどうやって考慮するんだよ。たとえば、多数決で五対三になったらそのときは三が通るでしょう。二は切つていますね。切つたら完全合意にならない。いま日本以外のシステムは全部それだから、世の中メチャクチャになっているのです。

日本のすごいところは、どんどん思想的にまとまってきていることです。私がスイスから見てみると、右もなく左もなく、一体化して大きな塊になっている。これは世界中をみても日本だけの現象です。ヨーロッパでは一体化するどころか、おたがいどんどん離れている。離れるとどうなるか。多数決でいくしかないんです。

●質問（南寮三年・福丸君）

完全合意というのは、すべてにおいて徹底的な討論を交わすことにより、おたがい離れることなく近寄った状態で合意ができるということですか。

■回答

そうです。完全合意では、自分の答えと相手の答えが一体化します。答えがひとつしかない。それが日本的な合意なのです。これは民主主義とは比べものにならないくらい高度なものです。

●質問（北寮三年・山本君）

場所主義の議論では、徹底的な議論によりひとつの答えが出て完全合意するとおっしゃいました。そもそも意見が分かれていたのが、議論し答えを出したということはおたがいに歩み寄り、妥協して答えを出したということだと思えます。妥協によって出した答えというのは、本当に正しい答えといえるのでしょうか。

■回答

これが大事なところなんです。ここをまちがえるとエセの合意になる。では、妥協を合

んだ合意と完全合意とはどこがちがうか。たとえば、私の現場だと生産ラインというものがあります。生産ラインに製品が流れている——これが「現象」です。その現象を、機械屋、電気屋、システム屋の三人が見ています。生産ラインはトラブルの元ですから、問題点がいつばい出てきますね。三人がそれぞれ生産ラインを見ていて「あれ、おかしいな」と思うことがある。このとき、機械屋は機械屋として生産ラインを見ています。電気屋として見ているわけではない。システム屋はシステム屋として、電気屋は電気屋として見えています。そうすると、生産ライン（現象）への見方は三つに分かれているわけです。この三つをどうやって合成するか。

それは「あれ、おかしいな」と思ったとき、ハッと思った「現象」以外はしやべらないことなんです。「ハッと思ったときのこと」を言葉にするのはダメで、これは加工が入っている。個人の考えが入っている。そうではなく、見たままを、そっくりそのまま話すんです。

西田幾多郎はこれを「純粹経験」といっています。西田は「経験を言語化したもの」を指して経験といっていますが、そうではなくて、ハッと思ったそのものを純粹経験

とって重視しています。何人かで現象を見ているときに、純粹経験だけを交換する。室町時代だったら連歌がそうです。製造業の生産ラインは、システムを改善するときこのプロセスをとります。純粹経験の交換は、言語（言葉になるもの）のやりとりは十%ぐらいで、あとの九十パーセントは非言語（言葉にならないもの）です。非言語のやりとりは共同体でできない。知らない人ばかりが三人だったら伝わらないでしょう。だから共同体が大事なんですよ。

日本の生産システムはものすごく高度です。これはほかでは真似できません。アメリカもヨーロッパも、やろうと思ってみんな失敗しています。日本の生産システム、トヨタの生産システムを真似ようとして失敗している。共同体ができていないのです。共同体ができていなくてシステムの改善をやったって、ジャストインタイム（ジャストインタイム生産システム。トヨタ生産方式の代表的な要素）をやったって、合議制をやったって、うまくいくはずがない。共同体が本質です。純粹経験を完全に交流しあうことが本質なんです。共同体じゃないやできないんだよ。

そうすると、学生時代に共同体をつくつ

た経験のある人は、こういう場所に行ったときに共同体をつくって純粹経験をやりとりする力があるわけです。君たちに「共同体をつくる力を養え」といっているのはそういうことです。二十一世紀のリーダーシップは、必ず共同体をつくることのできる人がとります。今の日本の製造業界はそれで主導権をとっているのです。

先ほども言ったように、このやり方は非常に日本的です。ヨーロッパ人とアメリカ人と中国人とインド人にやってみるといってもできません。それが日本の製造業の強さです。円がどんどん上がっているでしょう。輸出が増えているからです。日本しかできないから、よその国は輸入するよりしようがないのです。日本の文化と製造業がかちつとリンクして、こういう現状になっています。

この文化は、古くは「もののあはれ」といって、平安時代からあるんです。たとえば、花を見ているときに何かを感じるというのがそうです。ものをみてその奥を感じるセンス、これが「もののあはれ」です。西行法師は桜が満開なのをみて死を感じたといっています。「もののあはれ」は「かわいそう」という意味ではなくて、現象の奥にあるものを感じる力、現象の奥の本質

を見抜く力、どうやって感じるかという力
 なのです。これが非常に大事です。

●質問（乾寮一年・大脇君）

なぜ日本に場所主義が必要になるの
 ですか。そもそも場所主義は必要なの
 ですか。

■回答

先ほども言ったように、必要か必要
 ないかという問題ではなく、日本は場
 所主義の上に成立しているんです。場
 所主義を外しては日本は考えられませ
 ん。「場所主義」として見るのでなく、
 絶対化して見たほうがいいです。場所
 主義は日本の数万年にも及ぶ歴史や文
 化そのものなのです。

●質問（乾寮一年・大脇君）

場所主義によって日本はどうなっ
 ていくのでしょうか。

■回答

たとえば私の現場は製造業だけど、
 二十世紀は日本の製造業が世界をリ
 ードする時代に入っていきます。ハイ
 テク製品は日本からしか出てこない
 からです。いま言

ったとおり、何万年にも及ぶ日本の
 文化・歴史・伝統から出たものだから
 動かしようがないし、同時にほかは
 真似できません。さつき、アメリカと
 ヨーロッパがトヨタ生産方式を真似
 したけど失敗したといいました。今や
 誰も真似しようとしません。なぜか。
 真似できないんです。

●質問（乾寮四年・伊藤君）

そうになると、製造業でつくった
 ものを輸出、運搬しないといけない
 ですね。今日、エネルギー問題はか
 なり重大な段階に入っていると思
 います。今後ますます深刻になると、
 運搬さえもできなくなるんじゃない
 かと、思っています。さすがにそれ
 はないでしょうか。

■回答

グローバル経済は石油が2ドルの
 ころから始まっていますが、今は石
 油は150から二百ドル近くになっ
 ています。おそらく今後は二百ドル、
 三百ドルと値上がりしていくだろ
 うと思います。それでもなおペイす
 る（採算がとれる）ものがあるん
 ですよ。ペイしないものは運ばませ
 ん。それは経済原則ですから、放
 っておけばいいんです。あまり心配
 する必要はないと思います。

●質問（乾寮四年・伊藤君）

近年、フェイスブック、ツイ
 ターなどのSNS (Social Networking Service)
 が流行していますが、そういう時代
 でも場所主義は通用するのでしょうか。

■回答

それは情報社会ということ
 を考えたほうがいいですね。先ほ
 ども言った「死んだ情報」と「生
 きた情報」です。死んだ情報をと
 ったり付たり加えたりしたのは二
 十一世紀の最初とすると、もうそ
 の時代は終わりました。残ったもの
 はすべて中・後進国に移っています。
 コスト競争で安いところが売れる
 という段階に入っています。もう先
 進国のやる産業ではなくな
 っています。先進国はクリエイティブ
 なものをつくっていく段階に入
 っているのです。そうすると、生
 きた情報を扱う以外にはない
 ですね。死んだ情報をいくら扱
 っても、「京」（理化学研究所）
 というようなスーパーコンピュータ
 が何台集まっても、いずれ死
 んだ情報なんです。そこからは
 二十世紀が要求するものは何
 も出てこないのです。

私が言いたいのは、「場所」は
 生きた情

報なんだということ。君たちは学校で、一生懸命、死んだ情報を習っているけども、そういうものは適当にしといたほうがいいというのはその点ですね。生きた情報を扱う時代に入ってくると、死んだ情報を扱う情報システムは終わります。その後の展開はありません。あるとすれば、デジタルの情報システムからアナログの情報システムに移行するぐらいです。生きた情報はアナログですからね。そうするとアナログの電算機があるかということなんですけど、まだほとんど使えないものにならない。デジタルの計算機で全部の情報を伝えようとする、非常にムリなことになる。デジタルの時代は終わっているのです。

そうすると、共同体の「生きた『場所的』な情報」をどうやって情報システムの中に練りこんでいくか。実はすでに日本で始まっています。おそらくこれは日本からしか出てこないと思いますね。次の情報社会は完全に日本がリードしていくようになると思います。

デジタルの情報時代は終わりました。君たちがまだデジタルをやっているのではありません、それは時代遅れです。適当なところで打ち止めにして、共同体の生きた情報に特化していくことをやるべきです。

●質問（乾寮四年・伊藤君）

デジタルな情報というのは、客観的なデータだとか、そういうことなんですか。

■回答

そうですね。完全に普遍的な情報のことです。どこへ持っていても伝わる情報です。ところが、生きた情報というのはその生きた場所でしか伝わらないのです。その生きた場所でしか発生しない。

●質問（乾寮四年・伊藤君）

僕もツイッターをやっていたので、よく「どこどこでこういうことがあった」とか、そういう話をつぶやいていました。ツイッターでたった今みたものがリアルタイムでやりとりされるのは、「生きた情報」のように思えるのですが、いかがでしょうか。また、ある場所で起こったことが、別の場所で書かれるということもあります。ローカルな現象が普遍化していくということも、このツールではよくあると思うんですが、どう思われますか。

■回答

情報が発生するとき、発生している情報

がどう動いていくかというのはアナログ情報です。ところが、現象に対して答えが出たものについてはデジタル情報になるんですね。「死んだ情報」ですよ。

アナログ情報は、生きた情報からしか合成できません。これは人間がやらないといけないことです。人間が経験と知恵を出しながら、三日三晩かけて合意をつくっていく、場所を織りあげていく。そういうことをしないとアナログ情報はでききません。

●質問（乾寮四年・伊藤君）

つまり、こういう理解でよいでしょうか。ある現象が起こって、「これは何なのか」というところをそれぞれが判断して話し合っって「どうもこういうものらしい」と判断する。こういうものがアナログ情報ですか。

■回答

そうですね。でも、「こういうことだった」と決まったら、それはデジタル情報になります。それはもう誰でも使える普遍的な情報になっているんです。そこから新しいものは出てきません。それは結果だけで、原因でもプロセスでもなんでもないので。

● 質問（乾寮四年・伊藤君）

アナログ情報はどうやって活かせばいいんでしょうか。

■ 回答

それが「場所主義」だ。

● 質問（乾寮四年・伊藤君）

答えは出さないということですか。

■ 回答

いや、答えは出ます。「これ、おかしいな」と思う人が、現象から本質を追求していつて答えを出す。その答えが現場の改善につながっていくわけです。

● 質問（乾寮四年・伊藤君）

その答えはアナログですか、デジタルですか。

■ 回答

デジタルですね。これはもう誰でも使える普遍的な情報です。中国に持っていてもできるし、インドに持っていてもできる。ところが、答えを出すまでのプロセスはそこできれないのです。

● 質問（東寮四年・瀬良君）

僕は場所主義というのは教育や文化として正しいと思っています。僕自身、和敬塾に入って人間力という点で成長できたと思うからです。

先ほど民主主義は堕落したとおっしゃいましたが、僕はどちらかというところ民主主義を信じている側なので、今の民主主義がうまくいっていないのは、本当の意味での民主主義じゃないからだと思っているんです。年功序列や終身雇用制、男尊女卑、新しいことを認めない風潮、不平等な環境などは、民主主義的でない要素だと思います。このことについてどうお考えでしょうか。

■ 回答

民主主義の決定的な欠点は、多数決ということです。多数決ということは反対意見を切っているわけです。そうすると、全員が完全には合意していません。ある集団が、完全合意までいけば非常に品質の高い答えが出るのに、それを途中でやめている。やめているからディベートが始まる。全員が合意していればディベートにはな

らない。途中でやめるからディベートが始まって、全員の合意がとれない。

今の民主主義を見てみると、たとえばギリシャの問題はどうするかと思いますね。揉めに揉めていまだに答えが出ません。おそらく何年も答えは出ないだろうと思います。なぜか。民主主義だからですよ。そのつど多数決で決めるんです。ところが、多数決で決めた答えは答えになりません。そういうレベルの低い民主主義の時代は二十世紀で終わったといっているんです。だから、君がもしいまだに民主主義を信奉しているとすると、それは完全にだまされているんだよ（会場笑）。アメリカにだまされていると思わないといけない。

● 質問（東寮四年・瀬良君）

僕も、ロシア革命の頃から民主主義がダメだといわれつづけているのは知っています。でも、いまだに民主主義は世界の主流を占めています。

■ 回答

その主流を外れているのが日本です。

● 質問（東寮四年・瀬良君）

日本が孤立しているということになり

ませんか。

■ 回答

日本の今の動きを見てみると、非常に合意のとりやすいかたちになっていきますね。

ただ、考えなければいけないのは、二十世紀で政治の時代は終わったんですよね。

民主主義の時代が終わったと同時に、政治、軍事、外交など、二十世紀をリードした分野は後退しました。いま世界中の政治は完全に迷走しています。おそらく、今のまま民主主義でやっている限り、治りません。民主主義でやっている限り、今の民主主義でやれるレベルの政治だけになる。すると、どんどんシュリンクした(縮んだ)政治になってくる。政治の重要性はおそらく二十世紀の何分の一にも落ちるでしょう。必然的にそうなってきました。

● 質問 (南寮一年・嘉屋君)

理事長は、製造業に携わる一方で資本主義を否定されています。これはどういうことでしょうか。

■ 回答

場所主義の製造業と、資本主義の製造業があるんですね。ほかにもいろいろあると

思いますが。

我々は場所主義の製造業をやっています。日本で伸びているのは、ぜんぶ場所主義の製造業です。場所主義から外れた製造業は、さっきのパナソニックやシャープと同じように、崩壊が始まっています。

資本主義の製造業というのは、だいたい崩壊すると思いますよ。というのは、資本主義ではそんなにレベルの高い合意ができません。ルールと組織で合意をつくっていくレベルだと、完全合意にはほど遠い。完全合意から出てくるレベルの高い知恵と、組織とルールから出てくる知恵では、おのずとレベルの差が大きく開きます。それが今のアメリカの製品と日本の製品の差になっていると思いますね。

● 質問 (北寮二年・河越君)

以前の講演会で、大量生産型の企業、資本主義型の製造業は崩壊するとおっしゃいました。それは実際、崩壊に近づいていると思いますが、資本主義型の製造業が大量生産型だとすれば、場所主義型の製造業はどういう型だといえるでしょうか。

■ 回答

まず、製造業には部品の製造業と組立産

業と二つあるんです。組立産業はテレビを

組み立てたり乗用車を組み立てたりする。これは組立ラインさえあればどこにでも持っていける産業です。中国でもインドでも韓国でも、どこにでも持つていつて物をつくる。これは、二十世紀に日本が完成させた、いわゆる大量生産技術をベースにしています。日本が戦争中に開発した大量生産技術が、戦後、日本の大量生産工業に活かされて、自動車から家電から弱電からテレビから全部この技術でつくっています。組立ラインを東南アジアに持つていつて組立作業をする、部品だけ供給する。そうすると、人件費と土地とエネルギーと建物が安ければ、これはもう競争にならないですね。それで、組立産業がどんどん日本から出ていったわけです。

私は前から、「日本でテレビなんかつくる時代じゃない。あんなもの早くやめろ」といつていました。今、ものの見事につぶれています。自動車をつくる時代でもないですね。ただ、ハイブリッドのエンジンは日本でないといけない。ハイテク部品は日本でないといけないからです。でも、組立産業で中・後進国と競争してもダメです。パナソニックはそれをやっています。サンヨーとシャープもそうです。あんなものは

とつくのとうにやめていないといけない。何を考えていたか知らないけど、ムリしてやってみてつぶれましたね。

組立産業は中・後進国にうつして、生産財としての製造ラインは日本で開発する。ロボットから始まって、あらゆるものの製造ラインは日本の開発が最先端です。中・後進国の生産工場の設備はほとんど日本製なのです。これが最近の日本のいちばん強いところですよ。それで、生産財をつくらせている日立製作所とか三菱電機とか三菱重工が、いま元気がいいわけです。前川製作所も生産財をつくらせて世界中に売っています。これは円高なんて関係ないんですよ。安ければ安いほうがいいですけどね。

今後、生産財の最先端のものは日本からしか出てきません。それとハイテク部品も日本でないときません。さっき言ったハイブリッドモーターがそうです。普通の部品は中国でもインドでもどこでもできます。日本でないときけないハイブリッド製品、そういうものがいっぱいあります。こういうものが、おそらく二十一世紀の日本の産業を支えていくと思います。

●質問（北寮二年・河越君）

場所主義についての質問です。和敬塾で

よく話し合われる問題に、一年生が入ってくるときに行う新入生歓迎行事があります。僕たち北寮では、特に新二年生がそれについて話し合い、どのような新入生歓迎行事を行うかを決めます。塾生の決定に対して、OBや塾事務所や寮事務所から賛否両論が出ますが、塾関係者は同じ共同体として新歓の問題を共有すべきであり、これでいいんだと思います。

ですが最近、北寮にテレビの取材が入り、北寮の新入生歓迎行事がテレビ放送される可能性が出てきました。テレビ放送によって塾外の多くの人が和敬塾の新歓の問題を知ることになります。そういう場合、日本中の人たちと場所主義的な議論をすることはむずかしいのではないのでしょうか。

そうなると、場所主義は行き届く範囲に限界があるのだと思います。たとえば、一億三千万人の日本人全員が、小さな集落や和敬塾内と同じように場所主義的な議論をすることは可能なのでしょうか。

■回答

民主主義の時代が終わったと同時に、ジャーナリズムの時代も終わりました。ジャーナリズムがいったことで、実際に起きた

ことはほとんどありません。あれはかなりの部分がウソですよ。新聞やテレビをよく見てごらん。

ジャーナリズム自体がもう崩壊しているのです。取材は断ったほうがいいかもしれないですよ。共同体にとつては変なものはいれないほうがいいのです。完全な共同体ができあがっていいのです。新入生歓迎の時期は共同体として微妙な時期ですよ。そういうときに外部の人を入れるのはどうか。それこそ北寮のなかできっちり合意して、やめるならズバツとやめればいいでしょう。

●質問（北寮二年・河越君）

僕が気になったのはそこではなく、問題を共有する範囲が広がったら、全員が合意することができなくなるんじゃないかということですよ。

今回の取材については断るか断らないかというだけのことですが、日本国内の問題についてはジャーナリズムを排除するわけにはいかないと思います。ジャーナリズムがなければ末端の国民が知ることはできません。末端の人たちも含めて合意することが場所主義だとすれば、一億三千万人の日本人は完全合意ができるのでしょ

うか。

■ 回答

「場所」が重層的に積み重なって、ひとつの日本という「場所」をつくっています。そういう日本という「場所」の頂点が天皇なのです。小さい共同体がいっぱいあって、それぞれにリーダーがいる。リーダーが集まって、その中で自然にリーダーになったのが天皇なのです。私は奈良出身ですが、奈良だと「天皇はん」と呼ぶんですよ。隣りのおやじさんみたいにね。共同体のリーダーの中から自然にリーダーになったのが天皇。日本はそういうかたちでできています。そういうかたちでできている社会がいちばん健全なのです。

ジャーナリズムがいつころから出てきたかという、文明開化後、西洋が入ってきてからですね。あれは本当に必要なのか、考えたほうがいいと思います。平安の時代、室町の時代、江戸の時代にはジャーナリズムはありませんでした。ジャーナリズムがなかったとき、日本は合意ができなくて、場所主義的なものは成長しなかっただろうか。そうではないでしょう。どんどん成長しています。ジャーナリズムはただの外的要因で、しかももう崩壊している。新聞

はもう何年ももちません。新聞なんてひとつあればいいですね。だから私は、二十一世紀に場所主義が中心になるにしたがつて、ジャーナリズムのウエイトはどんどん落ちてくると思います。ただ、ゼロにはならないかもしれません。

● 司会

まだ質問したいことがあると思います。時間が差し迫ってまいりましたので、これで終了とさせていただきます。ありがとうございます。(拍手)